



観光立国論は宿題

桑野 巍

首都圏に住んでいる旅行好きの若者2人が大阪見物をしたんといってきた。「君たちの希望はどこなのか、案内するけれどももっと具体的に」と連絡したら、彼らは自分たちのプランをメモしてきた。1日目は大阪城、大阪ミナミの戎橋周辺の盛り場、安倍晴明神社、住吉大社など、2日目はUSJ、3日目は京都に行きたいと書いてきた。大阪見物と書いてあるのに京都へ逃げるとは、と思ったが、これは仕方ないのか。大阪は観光資源が多いようで少ないからなのか、と憚^{ひが}んだ。

若者たちは毎年休暇をとって海外と国内を交互に旅するリッチ族らしい。泊まるホテルも一流クラスで、安全重視のようだ。知的好奇心の塊を持ち続けているのには感心するし、自分の足で歩き、眼で見、新発見を味わおうとする行動力には頭が下がる。年齢的に30歳以上も離れているから若さがあり、その行動力を見ていると躍動感も違うし、内面的な価値観も異なり、つい妬み心を持ってしまう。

いよいよというか予定通りに若者が新大阪駅に降りた。新入社員当時の顔が思い浮かんだが、今は何だか引き締まって見え嬉しい感じだ。「元気確認」を終え「きょうのコース」を説明したら、彼らは合意してくれた。大阪城、住吉大社など行く先々でいろいろな質問が出るだろうと思っていたので、少しだけ予習していたが、どうやらこれは無駄に終わりそうだった。というのは旅の勉強は彼らの方が断然優れていることがわかったからだ。

昼食や夕食をともにしながら話し合ったが、聞けば聞くほど彼らの知識は深く、私は歯が立たず、自信を失ってしまった。情報収集力、記憶力、連想力など発展途上の彼らと退化方向の自分は比べるべくもないほど惨めだった。彼らは海外旅行先も10カ国を越えたといい、欧州へ行ったときには「学生時代にどうしても西洋史を勉強しなかったのか。これからでも遅くない」と謙虚さを顕わにする余裕さえみせた。

若いころに海外の自然や文化に触れ、歴史をひもとく彼らの姿を前にして「羨ましいなあ」という言葉しか出てこなかった。もう一つ真面目に「旅先や

旅中に大事にしているものは何か」と聞いたら、若者の一人が恥ずかしそうな表情で「人の心と時間とお金かな」と答えた。当方はうなずいて、もうお説教もできないし先輩面などんでもないと思った。

夕食時にはほんの少しのビールで乾杯、軽くのどを湿らした。多少のアルコール類の勢いも借りて、観光とは全く異なる話を披露した。「おれは東シナ海へ行って、中国が開発を進めている海底ガス田付近に行ってみよう」といったら、彼らは「相変わらずですね。記者根性が衰えていないんですね」と相づちを打ってくれたのが救いだった。そのあと彼らは「先輩は真面目にそう思っているんですか」とつけ加えたので「自分の眼で現場を見るのは大事だよ」とまた説教口調になってしまった。

大阪の印象を聞く前に、また先輩面をして「最近海外の旅が“多火”になって旅行業界も困っている」と話したら、彼らは「あまりオモシロイ洒落じゃないですね」ときた。テロの脅威、サーズ、鳥インフルエンザなどの“流行”に加え原油高騰で旅の高コスト時代が続く、と旅行業に勤務する友人の悩みを紹介したら、彼らは航空業界の安全に関する不祥事も不安、とつけ足した。

航空、ホテル、旅行者の移動に関わる3つの業界はこの先生が残るための試行錯誤を繰り返し、顧客の囲い込みに熱中すると同時に良質の情報収集と発信に躍起になっていると聞くと、最近消費者といわずに「創費者」といい、創費者との心のふれ合いを求めているようだ。それと、最先端工場見学ツアー、専門分野の旅として福祉専門家を伴っての海外ツアーや環境分野の見学ツアーなどの定着化を狙っているとか。

それにしても日本人の海外・国内の旅行熱は高い方だが、訪日外国人の数はそう多くはない。どうしてなのか。治安、物価高のせいなのか、観光資源不足、PR不足なのか。「君たちはどう思う」と聞いたら、彼らは「大阪は“観光立国まず無理”。日本の観光立国論は宿題にして下さい」とかわした。

(自治大阪編集委員会顧問
時事通信社元大阪支社長)